

16/09/20

【アジア特Q便】 呉軍華氏「中国を視る」 G20 杭州サミットにみる米中関係の虚々実々

QUICKではアジア特Q便と題し、アジア各国・地域の経済動向についてアジアの専門家独自の視点をニュース形式で配信しています。今回は、日本総合研究所理事・呉軍華氏がレポートします。

首脳会談が実現できるか否かが常に 이슈になる日中関係と違って、アメリカと中国の首脳はかなりの頻度で直接会って話し合いをする。ちなみに、習近平体制が発足した 2013 年以來の 3 年余りの間においてすでに計 7 回もの米中首脳会談が行われた。

普通の人間関係と同様、各々の国を代表するトップ同士が頻繁に会って話し合いをしようとするのはおおよそ二つの理由のどちらかだ。すなわち、一つは互いに大好きだからである。もう一つは好きではないものの相手国との関係がとても重要だと思っているからである。アメリカと中国の場合は明らかに後者が理由になっている。しかし、21 世紀のもっとも重要な二国関係だといわれる米中関係と比べて、重要性の度合いに多少の差があっても、嫌いでも引越せない隣国同士であり、また、世界の第二と第三の経済大国としての中国と日本の関係も重要だということについて、恐らく否定できる人はいないだろう。それにもかかわらず、なぜ、日中首脳会談の実現がなかなか難しいのに、オバマ大統領と習近平主席は年平均約 2 回の頻度で会ってきたのか。その原因は結局、中国の台頭に伴い米中間の利害対立が増大しても米中が直接的にかかわる問題はもとより、温暖化対策や北朝鮮の核問題といった世界の問題を解決するためには双方の協力が不可欠だとの認識が両国のリーダーにシェアされていることだと思われる。換言すれば、米中関係の緊張の度合いが増強するほど、トップ同士が直接的に話し合う場を確保し、両国の関係をマネージしなければならないというわけである。ちなみに、先日、中国で日中関係に長年携わってきたある友人に「日中関係がなぜここまでこじれたか」と聞いたところ、「日本とどんなやりとりをしても結局日本が何も決められないことを中国が悟ったからだ」との答えが返ってきた。

杭州での 20 カ国・地域 (G20) 首脳会議を舞台に展開された米中間の一連の駆け引きをみると、摩擦や対立、ひいてはある程度の衝突が起きる局面があっても、そうしたことがそのまま両国の関係の大事に至らないようにする努力が米中両国でみられた。たとえば、杭州空港に到着する際のオバマ大統領に対する中国側の接遇方法や警備をめぐるホワイトハウス関係者・大統領随行者の記者と中国の警備関係者の間で激しいやりとりが展開された。この事態に両国の世論は大きく反発したが、オバマ大統領は「このようなことは初めて起きたことではない。同盟国との間でも起きたことのあることだ」となだめた。一方、中国の方も首脳会談後「米中杭州首脳会談成果リスト」を公表し、2013 年以降オバマ大統領と習近平主席の強いリーダーシップのもとでの米中関係を積極的に評価した。

11月の米大統領選の結果を受けて、米中関係が今後ギクシャクするのではないかとの懸念が強い。中国の台頭に伴うパワーバランスのシフトが一層進む可能性が高いなかで、米中間で対立の構造が一層強まっていくと予想されるが、自分の力だけでは世界を仕切れないという認識が米中間でシェアされている限り、米中関係が本格的に対決する可能性は低いとみてよかろう。